

(資料)

復旦大学 《中国文学批評通史》緒論訳注シリーズ付録 1

王運熙 《中国古代文論の 研究方法について》訳注

甲 斐 勝 二*
東 英 寿**

翻訳に当たって

2012 年度、本論叢に掲載していた復旦大学文学批評通史緒論の訳注を完了した。今回はその付録として、通史主編の一人である王運熙先生の《中国古代文論の研究方法について》の訳注を掲載する*¹。批評通史執筆の指導に当たった王運熙先生の研究法を知ることが、《批評通史》を理解するために良い参考文献となると考えたからである*²。

この翻訳掲載について、王先生にはかつて許可を得ていたはずだが、念のためにもう一度確認しようと考え復旦大学の友人を通じて問い合せていたところ、今年（2014）2月8日に王先生の御逝去されたとの連絡を受けた。王運熙先生は古典文学研究で大きな業績を上げておられ、その考証を主とする堅実な学風によって多くの研究者も育てられてきた方である。かかる指導者を失うことは中国の古典文学研究にとっては大きな損

* 福岡大学人文学部教授

**九州大学教授

*¹ 原題は《談談中国古代文論の研究方法》。原載は復旦学報 1984 年。訳注は《中国古代文論管窺》齊魯書社 1987 年 3 月掲載の文章によった。この文章が《当代学者自選文庫・王運熙卷》（安徽教育出版社 1998）に掲載されており、筆者自身がこの文を定稿と考えていることが窺えるからである。本来ならば筆者に尋ねれば良いのだろうが、数年前から入院されており、尋ねる機会がなかった。

*² 王運熙先生は、1926 年生まれ、上海金山県の人。1947 年に復旦大学の中文系を卒業、その後教員として大学に残り、1978 年に教授、1996 年に退職されている。20 数名にわたる研究生（修士・博士）を育てられたという。

失であろう。また、訳者の一人甲斐にとって王先生は恩師でもあり、誠に残念である。しかしながら、生死は如何ともしがたいものがあり、今や御冥福を祈るしかない。既にもう一人の主編顧易生先生もお亡くなりになっている。復旦大学の文学批評史研究室の世代替わりが進むにつれて当然批評史研究も次の場面に進んでいるだろう。たとえば、復旦大学の教員を主に編纂された《中国歴代文論選新編》(主編黄霖・蒋凡 上海教育出版社)等は、それまでの《中国歴代文論選》(主編郭紹虞・副主編王文生 上海古籍出版社)^{*3}を引き継ぎ発展させた成果の一つである。とはいえ、ここでいう「文論研究」という領域は、日本では中国ほど研究が盛んではないようにみえ^{*4}、中国の文論研究史に興味を持つ関係者にとっては何かの参考になろうと、以前の承諾を頼りに、ここに訳出することにした。甲斐にとってはこれによって王先生の学恩に少しでも報いることができると思う。

さて、この題名にある「文論」という言葉について少し説明しておきたい。簡明に訳せば「文学理論」「文学批評論」或いはそれらを対象とした考察まで含む「文学理論批評」という語に当たるもので、現在では欧米の“literary criticism”の訳語に対応するものと概ね考えて良い。王運熙先生も訳出した論文の冒頭に「中国の古代の文学理論批評は、豊かな遺産を有している」と、篇名の「文論」を「文学理論批評」で言い直されている。

^{*3} 郭紹虞主編《中国歴代文論選》は、1964年に先ず三巻本として出版、その後1979年に4巻本となる。それを引き継いでこの《中国歴代文論選新編》が編まれた。なお郭紹虞は復旦大学の中国文学批評史研究室の創設者で、この新編の担当者は基本的にこの研究室の所属であるという。参照《中国歴代文論選新編・前言》(2006)。

^{*4} 日本に比べて中国で文論研究が盛んな要素の一つに、歴代の中国では、詩話や詞話などの多くの文芸論が生まれていたことが指摘できるが、もう一つ大きな要素として、人民共和国建国後に社会主義思想による文芸思想の整理や再構築が進められたことが指摘できるだろう。このあたりの事情は洪子誠《中国当代文学史》の上編の初めの数章が参考になる(翻訳は岩佐昌暉・間ふさ子編訳《中国当代文学史》東方書店2013がある)。もちろん、マルクス主義の文芸観自体は一つの文芸観として、決して奇妙なものではない。本論文中、王先生もマルクス主義からの文芸理論研究を成果として認めている。とはいえ、社会主義として出発した人民共和国で他の理論を廃するように全面的に導入が称えられれば、その観点に基づいた批評が盛んなることも不思議ではない。教条的な批評もまた当時は見受けられ、訳出したこの論文にもそのような論文の存在を示唆するところがある。なお、台湾でも、国立編譯館主編で成文出版社より、1978年に中国文学批評資料彙編として兩漢から清代まで、文体論や批評・創作論など、校点を加えた資料集が八分冊が刊行されている。当時はまだ所謂東西冷戦の中にあつた状況で、政治体制の違う場所でのこのように文学批評が共に重視されているように見えるのは、中国の文化伝統における批評研究の位置づけを示唆するようで面白い。

《中国文論大辞典》（彭会資主編・百花文芸出版社1990）でも「中国文芸（文学及び芸術）理論批評史上に常に見られる様々な概念術語と基本原理を体系的に整理し分類して…」とある。東西文明を異にするとはいえ、人間の五感や思考の類似性によって、同様の文化領域とその内容が生まれることは、不思議ではない。しかしながらそれぞれの文化の上にそれぞれの構造が立てられている以上、同じように見えてもそれぞれ独特の位置づけを持つこともまた不思議ではない。この「文論」についてもその独自性が「民族性」の語によって示されることがある。この民族的特性について、《中国古代文論教程・緒論》（蔣凡・郁沅主編 中国書籍出版社1994）では、その第1節「中国古代文学理論的民族特色」において、「中国古代文学理論の誕生、発展及び民族特徴の形成は、中国古代社会形態や中華民族の文化背景と思维方式及び中国文学の特徴とその縁辺発展などの諸要素と切れるものではない」と述べ、以下の4点を挙げていた。

- (1) 中国古代の長期にわたる封建社会の発展と歩調を同じくして、中国古代文学理論もまた長い歴史の発展を経てその体系を形成し、独特な存在としてそこにはその理論の正確さと深みはあったが、変革は緩慢で、保守性及び遅れた一面も持っている。そのため、小説や戯曲などの俗文学が重視されず、また欧州のように高度な文学理論への発展ができなかった。
- (2) 社会の農業的性格や宗法的性格により、中国の古代文学理論は人と自然の融和一致を求め、道徳の実践を重視し、文学の社会的内容及びその教化作用を強調することになった。
- (3) 中国古代文学理論の概念の範疇においてはしばしば抽象性と具体性、概括性と体験性が統一されており、その意味は確定してはいるが、また多義性もある。
- (4) 中国古代の文学伝統の影響を受けて、中国古代文学理論は表現（心情を唱い志を述べる）に重きをおいて、作品の醸し出す境地を重視する「意境説」と倫理性の高い「教化説」を二大柱とする文学理論体系として発展してきており、再現（模倣）に重点を置く西洋が、「典型説」を核心とする文学理論体系へ発展したのとは異なる。

中国古代文論と欧米との差異については、他にも語られるところであるが、その差異の存在は質の違いにもなるので当然注意しておくべきである。王運熙先生が別のところ

で西洋の批評概念を安易に中国の文論に無理矢理当てはめて理解することを戒めるのは至極妥当なところである*5。現在のようにグローバル化が進み、各種の文化の接触・混交が起これば、当代文学においては或いは西洋も中国もないかも知れないが、まだ文化交流に限界のあった「古代」と呼ばれる時代ではこの点は特に注意すべきところであろう。とりわけ漢字による「文」が重視され続けてきたかつての中国における「文論」は、漢代以来長く政治思想を支えてきた経学との関係も持ち、文学論の観点からばかりではなく、文化にまで及ぶ「文論」として、その社会性や思想性などから総合的な考察がなされるべきもののように思われる*6。

もう一つ触れておきたいのは、本論文で「マルクス主義」「毛沢東」「レーニン」といった当時の中国の思想状況を反映する言葉が用いられていることである。この文章の10年後に書かれた「私と中国古代文論研究」*7で著者は類似の内容を話されているが、このような言葉は見えない。翻訳した論文に引用されるこれらの言葉の内容自体は至極真つ当なもので、誰もがどこかで聞く内容ではあるが、当時それが誰の言葉として示すかは必要なことだったのだろう。論文の最後では以下のように述べて筆を擱かれている。

先述の各種の関係は、文論という対象を研究する際の幾つかの重要な関係について述べるだけで、関係の全てではない。やはりこの他の関係もまた注意すべきである。例えば、文学理論と当時の政治状況、学術状況との関係は、時にはとても重要なものになるのだが、ここでは述べずにおこう。

当時はまだまだ学術研究にもかなりの慎重さが求められる時代であったことを推測させる終わり方である。

訳注に当たって、引用される古典文献の解釈は著者の王先生を含めて復旦大学の研究者の成果があれば、それによっている。そのほかのもので、日本語訳が既にあるものに

*5 王運熙《我與中国古代文論研究・四注意民族特色》（《中国古代文論管窺》増訂本・上海古籍出版社2006・原載は《古典文学知識》1994）。

*6 甲斐勝二「中国文学における自立の問題」（『地域』－2009年度の福岡大学の取り組み2010）ほか参照

*7 脚注5に同じ。

ついで、文脈に沿う限りその訳を借りた。読みやすいように箇条書きの部分を段落に改めたり、問題となる語句に「」を付けたところもある。作者や作品については、著名なものには注を付けていない。また評論に用いられる用語は極力日訳に努めたが、中には適切な日本語が見つからず、漢字のままにしたところもある。中国の書籍・作品名については中国での用法に基づきそのまま《》で示し簡体字は日本の漢字に変えている。簡体字に不慣れな方にはその方がわかりやすいと思われたからである。注に引く日本の出版物は『』で示している。訳文の形式も含めて、御指正をお待ちします。

王運熙《中国古代文論の研究方法について》

中国古代の文学理論批評には、豊かな過去の遺産が残されている。先秦時代に文論は既に芽生え、南朝になると大著が現れる*⁸。唐宋以後は、文学創作の発展に従い、文論もジャンルが増え、詩話・詞話・曲話・小説評点等、きらびやかで多様な状況を呈している。これらの豊かな遺産に対して、“五四”以来、学者たちは重視をし研究を始めた。20世紀20年代から40年代の間、相当の分量を持つ中国文学批評史が幾部か現れており、《文心雕龍》や《詩品》などの専著にも、かなり質の高い注釈本が現れている。建国35年が経ち*⁹、古代文論研究にもさらなる発展があった。その主な現れは以下の点にある。

1. マルクス主義を運用して分析研究に努めてきた。正しい理論の指導の下、多くの論文や論著の観点はかなり鮮明で、分析はかなり深いものである。
2. 研究領域が拡大した。建国以前は研究者たちは詩文理論の研究を重視し、戯曲小説などの通俗文学批評は重視されなかったが、現在では状況に変化が起きている。詩文理論の領域では、研究範囲も拡大があり、それほど著名ではなく、過去に重視されなかった批評家たちも重視され研究がなされるようになった。幾つかの専門的な問題、例えば風骨、意境、比興等々、それぞれ多くの研究論文が発表されている。
3. 議論の雰囲気盛り上がった。少なからぬ論文が発表され、幾人かの批評家及

*⁸ 以下に引用される梁劉勰《文心雕龍》、鍾嶸《詩品》等の詩文評論の作品を指す。また梁蕭統《文選》や徐陵《玉臺新詠》等の詩文選集も、志向性をもった選集としてその中に含めても良い。

*⁹ この文章は1984年に書かれている。1949年の建国から35年になる。

びその著作、幾種かの専門テーマに対して真剣で熱心な議論が進められた。議論によって、少なからぬ問題への理解が深まっている。全国的な古代文論理論学会と文心雕龍学会が成立し、定期的に學術討論会が挙行され、《古代文学理論研究》、《文心雕龍学刊》の2種の刊行物が出版されている*¹⁰。

4. 資料作成の作業が重視されている。既にかなり体系的な《中国歴代文論選》*¹¹と《中国近代文論選》*¹²(前者にはかなり詳細な解題と注釈がある)が現れている。人民文学出版社は郭紹虞氏の主編になる「中国古典文学理論批評專著選輯」*¹³を出版し、もう数十種が出ている。古代文論類編、古代曲論類編などの種類の資料を編纂したところもある。この領域の仕事は、学术界にますます重視されている。
5. 研究成果が大きく増加した。上述の各種の状況が結びついて、研究成果が大量に出現する状況が作られた。《文心雕龍》に関する注釈研究の專著に限っても十余種がある。そのほか、《文賦》・《詩品》・《二十四詩品》・《滄浪詩話》などもみな專著が世に出ている。新たな中国文学批評史もまた幾種も出版された。単篇の論文となるとさらに数も多くなる。

建国以来の古代文論研究において、研究者たちは概ね同じ認識を持っている、それはつまりマルクス主義の指導の下にこれらの文化遺産を整理し分析して、古いものを今に活用するというもので、特に中国にふさわしい(原文は民族化された)マルクス主義文芸理論の建設に役立てようとするものである。研究者たちは、この方向に向かって努力

*¹⁰ 《古代文学理論研究》は、第1輯が1979年に中国古典文学理論研究会編で上海古籍出版社より出版、現在では胡曉明主編で華東師範大学出版社より出版、既に37輯となっている。《文心雕龍学刊》は文心雕龍学会編として《文心雕龍》齊魯書社より第7輯まで出版され、その後《文心雕龍研究》に引き継がれて北京大学出版より出版、2013年に出た第10輯は学苑出版社の出版であった。共に現在も継続中。

*¹¹ 《中国歴代文論選》：脚注3参照。

*¹² 《中国近代文論選》：舒蕪・陳邇冬・周紹良・王利器編選。人民文学出版社より1981年に出版。上下本で、郭紹虞・羅根澤主編の中国歴代文論選シリーズの一冊。このシリーズには、《先秦兩漢文論選》1996、《魏晉南北朝文論選》1996、《隋唐五代文論選》《宋元金文論選》1984、《明代文論選》1999、《清代文論選》1999がある(出版年代は訳者の手元にある書籍に基づく。)注11と同様書名には《中国歴代文論選》が見つが、内容は作者作品の解説および引用文の校点に留まり本文の注釈は付いていない。

*¹³ 中国古典文学理論批評專著選輯：人民文学出版社による郭紹虞・羅根澤主編のシリーズで、人民文学出版社によれば、注12のシリーズと互いに補い合う関係だという。こちらの方には例えば范文瀾《文心雕龍註》、陳延傑《詩品註》、郭紹虞《滄浪詞話校釈》、張少康《文賦集釈》など研究注釈本も含まれている。

をしているし、既にその成果を上げてもある。当然ながら、進展の過程においては、解決しなければならない問題がやはり幾つも存在する。その中で比較的目立つ問題は、古代文論の解釈と分析に対して主観に流れ、時には曲解までして、古代文論の本来の姿にそぐわなくなってしまうこと、そしてそれらを基礎として分析や評価を行うなら、しばしば古代人を現代化してしまう現象を生むことだ。この現象は、既に指摘されてもいるけれども、しかし相変わらずかなり広く存在している。この論では、私は方法論の角度から幾つかの注意すべき原則を提起しようと思う。その目的は古代文論の意義を正確に理解し、その本来の面目をはっきりさせることにある。

一 人物を全体的に見て、一部によって全体的な視点とはしない

古代の少なからぬ文学理論批評家は、その発言内容がしばしば豊かで複雑でそれはそれは単純ではない。あるケースでは、文論家は何らかの原因で、しばしば何か或る一点を強調して他のことには言及しない。このような場面に出くわした場合は、必ず文論家の全ての言論を観察し、全面的な考察を加えねばならない。もしも、その一点だけを捕まえて一面的に誇張を加えてしまえば、文論家の本来の意図から背いてしまうだろう。魯迅^{*14}先生は、「私は常々こう考えている、もし文を論じるとするならば、全ての部分に目を及ぼし、更に作者の全体像及び彼が置かれた社会的な状況に目を及ぼさねば、正確さの高いものにはならない。さもなければ、夢物語のようなものになりやすい」（《題未定草七》）と言っているし、また「もし取捨選択してしまえば、それは全体像ではなく、ましてや誇張を加えるとなると、一層真実から離れてしまう」（《題未定草六》）とも言う。彼は古代の文学を研究する者は選集本を読むばかりであってはならないと論じている。なぜならば、選集本は編集者によって選択されており、そこからは作者の全体像を見ることができないからである。以下に幾つかの例を挙げてみよう。

例えば、魏晋以来盛んに行われた美辞麗句（辞藻）・対偶表現（対偶）・音律構成（声律）などを重視する駢体文学（詩・賦・駢文を含む）に対する南朝の劉勰の態度はいかようなものだったろうか。《文心雕龍・序志》にいう：「聖人の時代から遠く離れ、文章

*14 魯迅《題未定草六・七》：《且介亭雜文二集》所収。選集本や校点本への注意もここに記されている。

の本体はばらばらとなり、辞人は奇を愛し、言葉は浮ついたものを貴び、羽を飾った上に更に絵まで描き、帯や手ぬぐいなどにも刺繍をし、本来の有り様を離れること甚だしく、今にも崩壊しそうな状態である」。^{*15} この言葉はとても重要で、劉勰が《文心雕龍》を書いたその目的はこれらの浮ついた文学状況を矯正するためだったことを物語る。もしこの部分だけを取り上げて一方的に理解しようとするれば、劉勰が魏晉から南朝宋齊時代に美辞を貴ぶ駢体文学に対して強烈な批判態度をとっていたと簡単に見なしてしまう。しかし、その《声律》篇からは、沈約などが提唱した音律の禁忌説（声病説）を強く支持しているのが分かるし、その《麗辞》《事類》の両篇からは、劉勰が対偶と典故の利用を非常に重視しているばかりか、またそうあるべきだと考えていることが分かる。《文心雕龍》全体も精緻な駢文で書かれていた。従って、理論上及び実践上では、劉勰は駢体文学の擁護者であって反対者ではなく、彼は当時の浮ついて軟弱な（浮靡）駢体の文風に対して、改良と節度を求めたにすぎない、と言わねばならない。よって、もし魏晉以来の駢体文学が形式主義文学だというのであれば（このような言い方は間違っているが）、劉勰がこの形式主義文学の反対者になるはずはない。《文心雕龍》はスケールが大きく、とりわけ豊かな内容を持つ大著である。近年来、《文心雕龍》の理論体系を研究すべきことを提唱する研究者がいるが、それはとてもよい意見である。なぜならば、それは劉勰の文学思想を全体的に研究することに注意を向けているからだ。《文心雕龍》の理論体系がいかなるものであるかという問題について、研究者たちは現在いまだ一致した見解を持ち得ていないが、皆が全体的な面から劉勰の文学思想を知ろうとするなら、かなり速やかに《文心雕龍》の中の多くの問題を明らかにできるだろう。

もう一つの例は、南宋の嚴羽が《滄浪詩話》^{*16}の中に掲げている芸術標準はどのようなものかという問題である。ある研究者たちはしばしば「興趣」であると考えているが、これも一面的である。《滄浪詩話・詩辨》では、「詩の原理には五ある。それは体制、格力、氣象、興趣、音節である」と述べて、詩歌芸術の成果を評価する五項目の標準を提出している。彼は興趣を提唱して、詩歌が真実性と具体的な形象を持つことを求めている

*15 引用される《文心雕龍》中の文言の日本語訳は主に王運熙・周鋒撰《文心雕龍訳注》（上海古籍出版社1998）の現代漢語訳に基づいて筆者が解釈したものを挙げたが、他に平凡社古典文学体系・筑摩書房世界古典文学全集所収の邦訳も見ている。以下同じ。

*16 嚴羽・《滄浪詩話》：嚴羽は生没年未詳。晩宋の人。自ら滄浪逋客と号した。宋の詩話中ではかなり体系性を持つものとして知られる。

る。その心情表現は自然で作為なく、内容は奥行きがあって、歌えば何度も嘆息をつくほどの響きがあるべしというものである。これは宋代の江西詩派^{*17}のもつ「文字を以て詩とし、学識を以て詩とし、議論を以て詩とする」^{*18} という弊害に向けて発せられたものである。興味以外にも、嚴羽は詩歌が「格力は雄壯」、「氣象は渾厚」、「音節は響亮」として作られ、盛唐詩の「雄渾剛健」な風貌を持つべきことを求めている。これは南宋の四靈詩派^{*19}の繊細な技法に苦しむ所から導かれる問題に向けて発せられたものだ。「体制」については、興味・格力・氣象などの各種芸術的特徴の総合表現である。つまり、嚴羽が掲げ且つ重視した詩歌芸術の準則（標準）には二つの方向があった。一つは興味が奥深いこと、一つは風格が雄渾であることだ。その後、清代の王士禛が前者を發展させて神韻説が現れ、明代の李東陽、前後七子及び清代の沈德潛等が後者を發展させて格調説が現れた。南宋時代、江西詩派の勢力と影響が特別に大きかったので、嚴羽はその現実状況に対して、江西詩派への批判において部分的な話を多く発言しているけれども、だからといって嚴羽の詩歌の芸術標準が興味ばかりを強調するものだと考えることはできないのである。

二 理論の原則と具体的な批評を結びつけて考察する

このことは、実は先述の第1点の中で概括してもよいのだけれども、非常に重要なので単独で取り上げて述べたい。一人の文論家が提出した理論原則或いは理論概括は、その文論家の具体的な作家に対する批評と非常に密接な関係がある。その理論原則或いは理論概括は、少なからぬ作家作品に対する評価を総括して提出されたものであり、また逆に彼の批評実践の根拠となったものでもあるので、必ずや結びつけて考察しなければならない。時には、ある文論家の思想の実質を理解する上で、その具体的な批評を見て理論原則と比べてみることは一層重要なものとなる。それはなぜか。まず、理論原則を述べた言葉は通常かなり簡約なもので、その内容もぼんやりとしていて不明確なものに

^{*17} 宋代江西詩派：北宋中期以後に現れる黄庭堅を代表とする詩派で、南宋では江西詩派詩論に対する議論がその批評の中心になったという（通史シリーズ《宋金元文学批評史》）。

^{*18} 《滄浪詩話・詩弁》の中で、近代の諸公の理解を批判する言葉。

^{*19} 四靈詩派：南宋中後期、永嘉四靈（徐璣・徐照・翁卷・趙師秀）らが江西詩派の詩風に不満を持ち、晚唐の詩を目標に掲げたが、言語風格は繊細で柔弱だった。

なりがちだからだ。次に、伝統的な批評標準などの要素の束縛を受け、文論家が理論原則を語るときには、偉そうな話をしてしまうもので、具体的な作家作品の評価の中に表示されるその文論家の本当の好みや趣味の所在には及ばないからだ。幾つかの例を挙げてみよう。

例えば、劉勰は辞賦をどのように評価していたのか。厳しく批判しているのかそれとも肯定という前提の下での批判であるのか。《文心雕龍・情彩》では、「昔詩經詩人の詩は（《詩經》三百篇を指す）、情のために文を綴ったが、近代の辞人の賦頌は、文を綴るために情をつくっている……故に、情のために綴るものは引き締まって真を表出し、文を綴るためのものは美辞の羅列で煩わしいほどだ」。この言葉は中国の歴史上の二つの異なる創作傾向を概括するものである。前者は《詩經》を代表とし、引き締まった文で真実を伝えるという優れた文風を持つ。後者は辞賦を代表とし、華美に過ぎてまとまりがないという欠陥がある。もしこの部分の内容の概括だけを取り出して見るならば、劉勰は辞賦に対して徹底的に批判する態度を取っていると考えてしまうだろう。しかし、実はそうではない。彼は辞賦を非常に重視して、詩歌・樂府の後ろに《詮賦》篇を置き^{*20} 兩漢魏晉の辞賦に論評を加えている。先秦の荀卿、宋玉そして漢代の枚乘・司馬相如・班固・張衡等の十家について、彼は「辞賦の英傑」と褒めているのである。魏晉の王粲・徐幹・郭璞・袁宏などの八家に対しても、賛美を加えて、「魏晉の賦首」と称えている。《詮賦》篇では漢代の京城・宮殿・帝王の狩りを描いた大賦に対しても肯定しており、「国内の様子を描き、狩りや御幸を描いて、その内容は輝いている」と称えるのだ。劉勰は封建統治の擁護者であって、帝王の声望を歌い褒め、その生活を描く大賦に対して、彼は基本的には認めているのである。彼はまた帝王が泰山に登って神を祭った封禪文をも肯定しているのだ。《文心雕龍》には《封禪》篇の專論があって、このような文章体裁について論じている。彼は更に辞賦が発展した漢武帝時代を「その後世に残した遺風や余りある鮮やかさは、比べものがない」（《時序》）と賛美する。ここから分かるように、劉勰は一度ならず揚雄の「辞人の賦は華美に過ぎる」という言葉を借りているけれども、彼の辞賦に対する態度は、根本的に揚雄とは異なっている。彼は揚雄のように若い頃の作を後悔して徹底的に辞賦を批判してはいない^{*21}。辞賦の完成や

*20 《文心雕龍》は篇配列が価値観を反映したものになっており、文体論二十篇の第1が詩、第2が樂府、第3に賦を扱っていて、その評価が分かる。

*21 揚雄は前漢の末に生きた漢代を代表する辞賦作家であったが、その後、賦の作成は

歴史上の位置づけなどは肯定するという前提の下、その度を過ぎた艶麗という欠点に批判を加えたのである。

更に劉勰が提唱する「風骨」の内容の問題を例にしよう。これは《文心雕龍》研究において意見が最も紛糾する問題で、ここで詳細に考察するつもりはない。私がここで明らかにしておきたいのは、我々がもし劉勰の具体的作家作品に対する評価を結びつけて考察することができれば、問題はさらに全面的に見ることができて、またいっそう容易に解決されるであろうということだ。《文心雕龍・風骨》篇では風骨^{*22}を論じる際に、司馬相如《大人賦》の「風力適^{つよ}し」を例として挙げ、潘島の《册魏公九錫文》を「骨髓峻^{たか}し」の例とする。もし、何人かの研究者の説くように、風がすばらしいというのは内容が充実し、健康で進歩的だとすれば、《大人賦》は決してそのような内容は持っていない。仮に風がすばらしいとは風貌がすっきりした爽快さを持つものだというのであれば、かの《大人賦》は確かにその芸術的特色を持っている。潘島の《册魏公九錫文》は当時では非常に有名で、《文選》に採録されている。その文章は漢の皇帝に代わって作成したもので、曹操の功德を述べ、九錫によって讃えようというものだ。潘島の用語と句作りは、極力《尚書》を模擬し、言葉は剛健で力強く、よって《風骨》では「骨髓峻し」と褒めたのである。潘島の文が「骨峻」、「結言端直（言葉はまっすぐ）」というのは、言葉遣いが剛健で力強い例としてはとても妥当な^{*23}ものである。ある研究者は「骨峻」の語が指すものは事柄の内容が充実して妥当であることだとするが、それでは通じない。

次に、鍾嶸の詩歌の典故利用の態度の例を挙げよう。彼の《詩品・序》では詩歌が情性を吟詠することを強調して、典故の利用を高く評価せず、宋齊時代の顔延之・謝庄・任昉等が詩作において大量に典故を用いた気風に強い不満を抱いている。もし、この部分の文章を見るのであれば、鍾嶸が詩歌の典故の運用に厳しく反対していると容易に思ってしまうだろう。しかし、鍾嶸の作家に対する品評と関係づけて考察すれば考えも違って来る。謝靈運の詩は、典故の利用がすこぶる多いのだが、《詩品》では上品に入れ、評価は非常に高いのである。たとえ大量に典故を用いた顔延之ですら、やはり中品に並

児童のころの好みで、まともな大人のすることではないと述べている（《法言・吾子》）。
*22 風骨：南朝に表れる文学批評概念。《文心雕龍》では下篇にこれを専論する《風骨》篇があるが、その内容理解については様々あり、ここはその問題を指摘したもの。

*23 原注：王運熙《〈文心雕龍・風骨〉浅釈》（王運熙著《文心雕龍探索》原載《中華文史論叢》1983年第2期）を参考。

べている。鍾嶸は作詩において典故を用いる必要はないと提唱しても、一概に典故の利用に反対したのではなく、典故の利用を頻繁におこない、「文章はほとんど書籍の抜き書き」という風潮に大いに不満を持っていただけなのだ。

次に、唐代の高仲武《中興間気集》^{*24}の選詩基準の例を挙げる。《中興間気集序》では、「言葉が典謨に沿えば、風雅に並ぶ」といい、また「王政の興衰を著述し、国風の善否を表現する」といい、また「体は風雅のありさま、理は清新のさま」と述べて、強調するのは《詩経》風雅の伝統であり、あたかも高仲武は詩歌の政治や社会的内容を重視しているようだ。しかし、その選集に選ばれた詩歌は、その実際の内容は序言で公言するものとはほど遠いものとなっている。《中興間気集》は大暦時代（769-779）の詩人の作品を選んでいて、その内容は大多数が日常生活を描写した詩人の情感（感受）を述べたものなのである。社会の現実を映し出し、思想性のかなり強い作品は、孟雲卿の《傷時》、劉湾の《雲南曲》、蘇渙の《変律格詩》などの詩作だが、書籍全体ではわずかな比重しかない。高仲武は錢起、郎士元の作品を特に重視して、二人の詩人を上下二巻それぞれの初めに置き、更に二人を王維以後最も傑出した詩人と見なしている。これらの具体的な評価から、《中興間気集》の選詩標準が、実際は王維派の雍容閑雅（ゆったりとして上品）なところに傾いていたことが分かる。以上、文論家の思想実質を知るには、時にはその具体的な批評を見ることの方が、理論原則より重要な場合もあることを述べた。高仲武がその一例である。

三 同時代の文論と関係づけて考察する

ある時代の文論家は、それぞれにそれぞれの個性があるものだが、同時に共通性も持っている。その時代にあって、多数の文人は、文学創作傾向と審美標準の面において、時代の風潮の影響によって、しばしばある共同点を持ち、その時代の文学趣味（風尚）を形成する。従って、我々が一人の文論家を研究するとき、彼と同時代の文論と関係づけて考察すれば、問題を一層はっきりさせることができる。例えば魏晋南北朝時は駢体文学が発展し、文壇では主導的な地位を占めた時代だった。この時代の多数の文人（文論

*24 高仲武《中興間気集》：高仲武は、大暦年間（8C中後半）頃の人らしい。よく分からない。王運熙／楊明《隋唐五代文学批評史》の第三章中唐の詩歌批評では第2節に高仲武を取り上げて、序文に言う社会性が二次的な位置にあることを指摘している。

家も含む）が作品の芸術性を測るときに専ら注目したのは、その作品に駢体文学の言語美、つまり言葉が美しく、対偶が巧みで、音律が整っている等の要素の有無についてであって、そのほかの部分ではなかった。文論家の少なからぬ作家や作品への取捨選択や品題の高低は、しばしば先ずこの点に注目したのである。三つの例を挙げてみよう。

一つは南朝文論家の《楚辞》に対する見方である。《楚辞》の中の屈原・宋玉の作品はその誕生した時代がかなり早いだけでなく、文学的成就が卓越して、漢代には人々から既に高い評価を受けていた。南朝時代では、しばしば《詩経》《楚辞》を並べ挙げて、《詩》《騷》と呼んでいる。劉宋の檀道鸞《続晋陽秋》では「司馬相如・王褒・揚雄の諸賢は、次々に詩賦を重んじたが、みなその文体は《風》《騷》に則っている」（《文選・宋謝靈運伝論》李善注に引用）という。沈約《宋書・謝靈運伝論》では、漢魏時代の文体の三度にわたる変化を述べたのち、続けて「このように或る時代の人々は、それぞれ見習った所があるのだが、その源流の始まるところを遡れば、《風》《騷》を祖としないものはない」と述べる。ともに《詩経》と《楚辞》の二つを詩賦の元祖と見なすのだ。劉勰はまさしくこのような認識に基づき、《辨騷》をその書の「文の枢紐」に並べ、「雅頌に依り」「楚篇を御す」べき意見を述べたのだ。《文心雕龍》の書籍全体では《詩》《騷》を並べて挙げるところが頻見する。例えば、「六言句、七言句は、《詩》や《騷》にちらほら出てくる」（《章句》）、「《詩》《騷》は適切に文字をつかう」（《練字》）、「《詩》《騷》が描く情景は要点をちゃんと押さえている」（《物色》）等は、劉勰の《楚辞》に対する重視の程度を見ることができる。また《定勢》は、「經典に範を取るものは、典雅な美しさに入り、《騷》にならうものは、艷麗で華やかになるのである」と述べ、典雅な五経に習ったものと艷麗な《楚辞》に学んだ作品を二つの大きな風格の違いとして区分すらしている。同時代の鍾嶸の《詩品》では、漢魏から宋齊までの詩人を評論して、これらの詩人たちの作品体裁の淵源を指摘して、大体《国風》、《小雅》、《楚辞》の三つに分けているが、実のところは「《風》《騷》を同じく祖とする」ということでもある。楚辞が生まれたのはつとに先秦時代であり、文彩は艷麗で、そのできばえは卓越し、後の辞賦、駢文の誕生に大きな影響を与えた。従って、南朝文人は《楚辞》を《詩経》と共に文学創作の祖先だとしたのである。《辨騷》が《文心雕龍》の中で、「枢紐」に属すのか、それとも文体論に属すのか、現在のところ研究者の意見はなおも一致していないが、私は同時代の文論に関係づけて考察することができれば、問題は比較的容易に解決できると考えている。

二つ目は南朝文学家の史伝文への見方である。蕭統《文選》は史籍中の伝記文を選録していない。蕭統は伝記文の描く人物・事件は華麗な表現（辞藻文彩）を欠く、すなわち駢文のもつ言語の美が足りないと考えたのである。しかし《文選》では、班固《漢書》、干宝《晋紀》、范曄《後漢書》、沈約《宋書》の中の賛・論・序・述等の文体を若干選録していて、それらが「言語の美的表現を集め（綜輯辞彩）」たもので、「美的事象の配列」は、「深い思索から内容は生まれ、美しい言葉によって結実したもの」、つまり文彩を持つものだと考えている。そもそもこの部分の文章は歴史の出来事を叙述したものではなく、歴史の出来事に対しての評論を公にしたものであって、対句も多く音韻も整えられ（中でも賛は韻文である）、典故を多用して言葉遣いも華麗で、駢文の美を持っているのだ。蕭統のかかる選録基準は全く駢文家の基準であって、史伝文に見える多くの人物を生き生きと描いた多くの伝記は、たとえその文学性が高くとも、散文文であって駢文ではないがために、蕭統は文彩がないと見なして選録しなかったのである。蕭統のこのような視点は、南朝の文論では広がりを持つ。《後漢書》を書いた范曄は、彼の《獄中より諸甥侄に與える書》で、その《後漢書》の序論が「みな精意深詣をもち」、「実に天下の奇作」であると誇り、その賛が「私の文の最も思索を凝らしたもの」と述べていて、その伝記が人物を描いて如何に出色であるかについてはいささかも触れていない。次に劉勰の言論を見てみよう。《文心雕龍・史伝》篇では《史記》、《漢書》に対して具体的な評論があるが、両書の事柄の叙述や人物描写の傑出した文学的成果を褒めることはない。篇中では《漢書》に「賛序は弘麗である」と述べて、蕭統が《漢書》の若干の賛や序を選録したやり方と気脈が通じることすらある。後漢は駢体文学が台頭し始めた時代で、《漢書》の賛や序は対句（駢語）や押韻する語（韻語）を多用しているが、《史記》の序、論となると散文を多用している。従って劉勰や蕭統はこの領域では共に《漢書》を重視しているのである。このように関係づけてみると、南朝の文論家は史伝文学の評価において、駢文の言語美を重んじたというその点について、一層ははっきり分かるのだ。

三つ目は、南朝文論家の陶潜の詩に対する評価である。魏晋南北朝の詩人の中で、陶潜の業績は最も傑出している。鍾嶸《詩品》は、陶潜を中品に置くが、これは後の宋・元・明・清の多くの人々から異議と批判をまねいた。この問題も、やはり南朝のそのほかの文論と関係づけて考察することができる。《文心雕龍》全体では大量の作家作品について述べているけれども、陶潜には全く触れていない（《隱秀》篇で陶潜に触れている箇所、それは偽文である）。《宋書・謝靈運伝論》、《南齊書・文学伝論》の二篇は少なからぬ重

要な作家作品を列挙しているが、やはり陶潜に及ぶことはない。陶潜の詩は言葉が質朴で自然、華美な文飾も尊ばない。従って南朝の駢文の文彩を崇拝する人々には重視されなかったのである。《詩品》では陶詩が「篤実で古のまま」、「世間はその質実さに嘆息する」といい、北齊の陽休之《陶集序録》では、彼が「言葉遣いは優れてはいない」という。共に彼の作品に文彩が足りないと考えているのだ。《詩品》は曹丕の詩が「鄙俗で会話のようだ」といい、庾璩の詩が「昔の表現が巧み（善為古語）」で、詩風が共に質実で素朴であるといっている。よって陶詩の由来とされることになった。駢文の辞藻を崇拝した南朝では、この種の詩歌は高い評価を手に入れがたい。蕭統の陶潜への評価は高い方で、彼は「文書はユニークで、美的表現も優れている」（《陶淵明集序》）と褒めていた。《文選》は陶詩の七題八篇、文では「帰去来辞」一篇を選んで、数はかなり多くはなっているが、魏晋の陸機や潘岳、宋齊の謝靈運、顔延之の諸家が、少なくとも二十余篇多ければ六十篇あるのに比べればやはり見劣りがする。これは蕭統が陶潜に特別な好感を持っていても、しかしやはり時代の趣味という束縛を受けていたからなのだ。古文運動が全般的な勝利を得た時代、文学趣味に巨大な変化が生じた宋代になって、陶詩の評価にはようやく明らかな変化が起きたのである。^{*25}

四 批評史の研究と文学史の研究を結びつける

文学理論批評は、作家作品を直接批評するものであったり、或いは創作経験をまとめて、それを概括し理論原則とすることだが、文学理論批評が形成されてしまうと、今度は向きを変えて創作に対して指導や推進の作用を引き起こす。二つの関係は非常に密接であるから、批評史の研究と文学史の研究を結びつけることで、理論批評の実質と価値を明らかにするのに役立つ、また文学創作の傾向と特色を理解するにも役に立つ。中国の歴史上少なからぬ著名な作家が、同時にまた理論批評でも優れていた。例えば唐代の白居易、元稹、韓愈、柳宗元、宋代の歐陽脩、蘇軾、黃庭堅、陸游等がそうである。文学史で彼らの作品を紹介するとき、しばしばその理論批評に及ぶけれども、それは確かに彼らの創作特色を明らかにすることに役に立つ。思うに、この方面の研究を更に大きく広げ、意識的に従来注意されていなかった資料を発掘し、一層広汎に批評現象と創作

*25 原注：参考 錢鍾書先生《談芸錄》。

現象を結びつけて考察するならば、我々の分析評価は更に正確さと深みを加えることができる。以下に三つの例を挙げよう。

例えば劉勰の宋齊時代の山水文学（山水詩を主とする）への評価問題である。劉宋の初期に、謝靈運は特色に富む山水詩を書き、東晋の玄言詩が詩壇を支配していた局面を根底から変えてしまった。その影響は強く、宋齊二つの時代の多くの人々は謝靈運を学び、多くの山水詩文を生み出した。劉勰は《文心雕龍》の中で、山水詩の特色は、華麗で新奇な言葉遣いで細やかに景物を描き出すことだと指摘する。いわゆる「その心情は外物を描き出しその形貌を尽くそうとし、文辞は全力を尽くして新異なものを追い求める」（《明詩》）であって、山水文学は景物を描くときに真に迫ったものとして、読者に「言葉を見てその姿が現れ、文字からその季節の様子を知覚できる」（《物色》）ようにさせるものなのだ。これは劉勰の山水文学への肯定的評価である。同時に、劉勰は山水文学の幾つかの欠点を批判してもいた。概ねのところ、1. 比興・風論という政治的内容が欠けている（《文心雕龍・比興》を参照）。2. 感情に虚偽がある、いわゆる「高禄の官職に心は向いているのに、隠居の景物ばかりを唱う」というものだ（《情彩》）。3. 言葉遣いが繁雑で、「後世の作者は華麗で繁雑な言葉遣い」という欠点があるとして、劉勰は「自然の景物は豊かで複雑なものであっても、それを表現する言葉遣いは簡潔なものが良い」と主張する。この3点の山水文学に対する批判が当を得たものかどうかは、作品の実際と結びつけて具体的な分析をするべきだろう。第1点、山水文学は確かに比興風論の内容を欠いているが、しかし、作品思想内容に対する劉勰の要求もいささか窮屈なものである。第2点は基本的に正確である。第3点、山水を描いた作品には言葉遣いが繁雑なものが多いけれども、精密な描写と密接な関係があり、一括して繁多冗舌だと排斥するわけにはいかない。劉勰はこの面では《詩経》に標準をおいて山水文学を強く批判している。彼は《詩経》の美刺比興を山水詩に求め、《詩経》の景物描写が「少ない言葉で多くの事柄を表し、その情景を余すところなく伝えている」（《物色》）という特色に基づいて山水詩を批判したのである。もし、文学史の南朝山水文学の分析批評と結びつけてみるならば、私は劉勰の山水文学への態度がいささか保守的で、山水文学に対する批判もいささか度がすぎていると考える^{*26}。

*26 原注：王運熙《劉勰論宋齊文風》（王運熙著《文心雕龍探索》所収・原載《復旦學報》1983年第5期）。

次に杜甫の文学思想について。杜甫は創作において、その思想内容を重視し、政治の弊害や庶民の苦しみを反映することを求め、加えて芸術上の技巧を重視し、優れたものを広く採用することを主張した。この二つの面は彼の批評の中に共に現れている。前者は《同元使君春陵行》を代表とする。そこでは元結《春陵行》、《賊退後示官吏》^{*27}の2首の詩が高く賛美され、新楽府の制作で庶民の苦しみを表現することを強く提唱しており、杜甫が《三吏》、《三別》等の詩文を書くに至った指導的な思想を示している。後者は《戯為六絶句》が代表である。そこでは庾信や初唐の四傑への肯定的評価を通して、芸術では多くの師に学ぶという杜甫の気魄が表現されている。過去の杜甫の文学批評研究では、しばしば《戯為六絶句》が重視され、《同元使君春陵行》がおろそかにされていた。これは片面を欠くものである。《同元使君春陵行》の詩は、杜甫自身の制作による進歩的内容をもつ多くの詩篇を理解するために重要であるばかりでなく、しかもその後の元稹、白居易の創作にも大きな影響を与えている。白居易の《読張籍古楽府》の詩では、張籍が楽府詩を書き各種の社会現象を映し出したことを賛美しているが、それは正しく杜甫のこの詩に学んだのである。

次に元結、孟雲卿の作家グループの文学思想について。彼ら二人は共に高雅な古体詩の制作を提唱した。元結は《篋中集序》^{*28}において近頃の作者が近体詩を作るのが好きで、「音律の規則に制限され」、「歌い手や踊り女の怪しげな声その部屋に響く」と批判している。孟雲卿の文章は現在残っていないけれども、杜甫の《解悶十二首》に「李陵蘇武を自分の師としていると言うが、孟雲卿の詩文選択はいっそうそれを確信させる」の句があるので、孟雲卿は蘇武や李陵の五言古詩体に学ぶことを主張したことが分かる。加えて高仲武《中興間気集》では孟雲卿の五言古詩がよく書けていると賛美していて、孟雲卿の啓発の下《格律異門論》及び《譜》の二篇を書いている（《唐詩記事》卷二五を見よ）。「格律異門」というのは、格詩（古詩）と律詩では入門方法が異なり、混同してはならないという意味で、孟雲卿の古体詩提唱を明快にしようという主張なのである。更に彼らの作品を見ると、元結自身の詩は皆古体であり、元結が《篋中集》に選んだ沈

^{*27} 元結は8Cの人。《春陵行》は、元結が道州の刺史として着任した折（763）、蛮族の略奪を受け疲弊した道州への徴税要求に対して罪を承知で拒むことを詠じたもの。その翌年、再度侵略を受けたときに作られたのが《賊退後示官吏》で、そこでは官吏の王命による徴税のほうが盗賊よりむごいと唱い、そんな仕事をするよりは職を辞したいと結ぶ。

^{*28} 《篋中集序》：《篋中集》は760年に編まれた五言古詩二十四首集めた詩歌総集。

千雲、王季友、孟雲卿などの7人の二十四首は均しく五言古体詩なのである。この7人の詩人のそのほかの詩篇も例外を除きやはり皆古体詩なのだ。彼らの詩はその風格が質朴古雅で、漢代の古詩に近接し、元結、孟雲卿の理論と一致する。こうやって結びつけてみると、《篋中集》のグループの詩人の創作特徴と文学主張は、一層明らかなものになるのだ^{*29}。

以上、第一例は、文論家の批評と、批評される者の具体的な状況を結びつけて考察したもの、第二、第三の例は、文論家の主張とその人物及びそのグループの作品を結びつけて考察したものである。このようにすれば、理論批評の実質や文学作品の特徴を理解することに対して、共に一層全面的に深い踏み込みができるのだ。

これまで述べたことをまとめるに、私は古代文論の研究では、関係する事物を可能な限り全面的に把握するべきであると考え。研究しようとするある文論家の全ての言論を把握し、その理論原則と具体的な批評を結びつけて考察するばかりではなく、更に同時代の文論と関係する作品と関連づけて考察を進めねばならない。毛沢東同志は「問題の研究には、主観性や一面性及び表面性をもちこむものではない」（《矛盾論》）といている。先述の各種の関係に注意することは、我々の研究作業の中での主観性や一面性及び表面性を減少させる助けがある。レーニンは、「本当に物事を知るためには、その全ての側面、全ての関連と“媒介”を把握し研究しなければならない」（《ふたたび労働組合について、トロッキーとプハーリンの誤りについて論ず》）という^{*30}。上述の各種の関係は、文論という対象を研究する際の幾つかの重要な関係について述べただけで、関係の全てではない。やはりこの他の関係もまた注意すべきである。例えば、文学理論と当時の政治状況、学術状況との関係は、時にはとても重要なものになるのだが、ここで述べずにおこう。

*29 原注：参照王運熙《元結〈篋中集〉和唐代中期詩歌的復古潮流》（王運熙著《漢魏六朝唐代文学論叢》。原載《復旦大学学报》1978年第2期）。

*30 篇名は大月書店刊《レーニン全集》32巻1959による。